

ユーラシアンホットライン

■いよいよ来日。プハラ民族芸能アンサンブル「サシマコム」

26日、ウズベキスタンのプハラから民族芸能アンサンブル「サシマコム」が来日します。ユーラシアンクラブが海外から招聘、あるいは招聘協力した芸能団は、フェルガナ盆地のゲ、ダバ市のスマラク及びシベリアヤクーツク市のハトラエフ夫妻について3件目。今回は、有志が招聘のための実行委員会をつくり、公演場所の確保、募金活動、チケットの手売り、チケットやリーフレットの作成、受け入れ計画の相談までミーティングを積み上げて取り組んできました。おかげで近江楽堂のチケットは完売、川口リリアも完売が視野に入ってきました。皆様のご協力をお願いします。

■ウズベキスタン歴史文化ツアー募集中！旅行費用は27万円

ユーラシアンクラブの名誉会長であり国立民族学博物館名誉教授、加藤九祚先生がウズベキスタン・テルメズのカラテベ遺跡で発掘を始めて5年目を迎えます。今年の5月18日で満80歳。ますますお元気で、先日のユーラシア紛争地特別フォーラムにパネラー参加した後15日ウズベキスタンに向かわれました。今回の歴史文化ツアーは、アフガニスタン国境でもあるアムダリヤ河畔の遺跡を訪ね、加藤先生の長寿と発掘の成果（仏塔の発見）をお祝いすることが含まれています。皆様のご参加をお待ちしています。

■「第一回ユーラシア紛争地特別フォーラム」開催。「充実した、濃い内容」と評価の声■

大富 亮（「フォーラム」運営スタッフ）

3月9日、晴れ渡った青空の下、第一回ユーラシア紛争地特別フォーラムが、早稲田大学小野講堂において開催されました。当日は午前10時から午後6時におよぶ長時間のシンポジウムにもかかわらず、120人も一般参加があり、活発な討論に熱心に聞き入る姿が多く見られました。

冒頭、伊東一郎教授（早稲田大学文学部）による開会の言葉「関心を持ち続けることが大切であると同時に、無関心であることが暴力として機能する時代だと思う」というコメントを皮切りに、アフガン、チェチェン、パレスチナなどの紛争地を実地に見てきたゲストによる迫力ある報告が聞か

れ、参加者からは「充実した、濃い内容だった」といった感想が聞かれました。また、今回事務局となったユーラシアンクラブのメンバーを始め、文教大学、日本映画学校などからも運営ボランティアが参加しました。皆さまご協力ありがとうございました。

<フォーラムから①>無関心な人々の共謀

ロシア民族学、ロシア文学を専攻する者として、アフガンとチェチェンには関心を持ち続けてきました。私の父が外交官としてアフガンに渡っていたことも、影響しています。

ところで、この早稲田大学のすぐ近くに、国立感染症研究所という、あらゆる病原体を使って動物実験をしている施設があります。今、この施設の問題をめぐる係争中

ですが、9月11日のテロ事件以降、この施設もテロの対象になるかもしれないということで、強く懸念されました。

私の先生だった江川卓という人が訳した、ヤセンスキイという人の『無関心な人々の共謀』という小説のエピグラフが、こういうものでした。『敵をおそれるな。敵は君を殺すのが関の山だ。友をおそれるな。友は君を裏切るのが関の山だ。無関心な人

伊東一郎教授（早稲田大学文学部）

恐れよ。無関心な人がいればこそ、世界には裏切りと殺戮が存在する』関心を持ち続けることが大切であると同時に、無関心であることが暴力として機能する時代だと思うので、ユーラシア紛争地フォーラムの場を有意義な情報の獲得に役立てていただければ、主催者としてうれしく思います。

<フォーラムから②>「自分のことだけ」は敵

「世の中に3つ特に悪い事がある。それは「偏見」「戦争」「核」。3つのようではその3つは1つに重なってもいる。共通点は「どれも人間の手に負えなくなり、不特定多数の人に害をおよぼす」という点。人間、手に負えない事はやるべきではな

い」

「相手と同等の武器、つまりグローブをつけた瞬間に私は「殴り殺されても文句が言えない立場」にあったわけです。ですからもしもナイフを持てば相手は拳銃を持ち、拳銃を持てばライフル、ライフルには

吉川英治（元プロボクサー）

機関銃、機関銃にはミサイルとどンドンエスカレートするだけです」「死にたくない限り、武器は一切持たないのが一番だ」という事がよくわかったし、小学校の授業で聞いたガンジーの不服従主義の意味もその時良く理解できました。小さくても武器

を持った途端に「終りへの始まり」です。それ以来、「本当の勇気」とはの「戦わないこと」というのが分かった気がします。ですから、アフガン戦争にはスウェーデンが軍隊を送り込まなかったのを聞いた時、その「戦わない勇気」のある国もあるんだなど思いました

「私は「正義」という言葉の定義は知らないがひとつははっきりしているのは「弱者を助ける」と言う事。弱い者いじめはちょっとしたテロリズムですが、「何もしない」「ただいるだけ」の人も精神的にはテロの一員かも知れません」

【話を戻して「行動」の重要性ですが、日本人はインチキな教育制度のせいで行

動力以前に思考力が全く欠けています。その結果と証拠が電車の中でマンガばかり読んでいる60才代から30代の大人達です。「への役にも立たない」と言うのは彼等の為にある言葉で、こうした愚かな行動は、彼らだけの範囲にとどまらず、若者始め社会の無気力化にもつながる公害です。すいている電車のたった1両にでもそういうのが10人はいるからおそれいっちゃいます。それでその態度も堂々としてるあたり1級テロリストに任命してやりたい気がします。またお年寄り優先席でふんぞり返る学生ばかりか成人の男女。彼等がバカのチャンピオンなら、それを作り出した親連、教育者達は名コーチと言う事になる。大人

も大人、子供も子供、全く同類です]

「おとながだらしがないから、少年が方引きし、小娘が電車で化粧しちゃう。関係ないようで関係あるんです。「周囲の人の気持ちを考えない」という点で一致し、悪いマナーが犯罪を直接引き起こさなくても、子供達にとって「やってもいい。やっちゃいけない」の境界線を不明確にしてしまう原因になっているのです。大人がしないことは子供ははとでもやりづらいものです。」

「日本人は一般にそれほど狂信的ではないと思いますが、極端に「盲目的」だと思います。「自分の事だけ主義」「人の事は考えない主義」は社会の、そして世界の敵です。

<フォーラムを終えて①>理解促進に一層情報選択能力を高めたい

大野 遼 (ユーラシアンクラブ代表)

構想3年。準備半年。かねて実施したいと考えていた「ユーラシア紛争地フォーラム」が終わった。全体を五部に分け、紛争地の実情から原因、背景、様々な意見に耳を傾けるという催しにどのくらいの人に来ていただけるか不安もあったが、参加者百二十一三十人。午前十時から午後六時までという長丁場に多くの人が付き合ってくれた。若者の姿が意外に多かったことが印象に残った。これは大成功の部類に入るのだろう。しかしマスコミの対応が鈍かったのは残念であった。私にとってはフォーラム自体の成功よりも、準備の過程で、情報収集し考えたことが最大の成果であった。

ユーラシアンクラブの立ち上げを提案したのは、少数民族に視野を置いて国家民族宗教を超えた理解親睦協力の枠組み、機関としての機能を果たすこと、紛争の絶えないユーラシアの民族共生の考え方を模索することが目的であった。理解等の促進に考える機能は欠かせないと思ってきた。どんな提案も考えたもありだ。しかし今回のフォーラムを通して、考える前提として、さらに「情報の選択能力」を付け加えることが重要だと強く思った。これまでも百数十回の文化講座などを通して日本人が理解を欠いたユーラシア情報を提供する努力は行ってきた。ところが旧ソ連崩壊後に起こった地球規模の激変の中で最も大きなことはインターネットに代表されるマスメディアの巨大化がある。多様な情報が大量に流通する一方で、偏った情報にさらされやすくなったという環境が生まれた。真実をつかむのにマスメディアは必ずしも有効ではないという現状もある。現象に流されやすい世界に私たちはいる。極端な利己主義と大量の情報。私たちは、ユーラシアどころか周囲の社会すら見えていない特殊な環境にあると思ってい

現代世界は、支配、介入の口実を作るために「仕掛ける」という植民地支配の常套手段を引きずって、「大国」と呼ばれる旧植民地宗主国がまだ幅を利かせている。旧ソ連の崩壊は一種の植民地帝国の行き詰まりであった。19世紀の後半にロシア帝国の支配下に置かれた中央アジアが解放された。しかし多くの先住民がロシアによる帝国の支配に肩身狭い思いで暮らし、あるいはチェチェンのように民族浄化と

いう殺戮にさらされているのが現状だ。第二次世界大戦後「超大国」として登場した米国は、米国という大地に暮らした先住民を殺戮、略奪し、これを「西部開拓」に仕立て上げる植民地帝国の伝統的やり方を引きずって、世界各地で挑発し、紛争介入の口実をつくりながら事実上地球規模の植民地宗主国を演じている。コロンブスがアメリカを発見したと主張する1492年、ラテン・アメリカ一帯には8000万人のアメリカ先住民がいた。それが、1650年には5%しか残っていなかった。ヨーロッパ社会の植民地侵略によって奴隷の売買を行い、人種差別を現在も引きずっている国が「自由と民主主義」「人権」の国、大虐殺を基盤とする国が「正義の国」と言い切るのに躊躇が無いのはいかになものか。イスラエルがシバレスチナで行っていることは、米国が先住民に対して行ったことと代わりが無い。その米国がイスラエルを支援している。侵略や挑発に対する「反抗」を「テロ」と声高に叫ぶ植民地支配の伝統に従っている。

「事件」後、声高に正義を叫び、報復に突き進んでいった米国に戸惑いを覚えたのは私だけではない。その世界貿易センタービルを倒壊させた「民間機による自爆テロ」という事件も、実は真珠湾攻撃同様、「開戦のための口実」として周到に準備されていたという可能性が、インターネット上の情報等で注目されている。アフガニスタンに中央アジア、カスピ海等の石油・天然ガスのパイプラインを敷設するための「アフガニスタンの将来を考える国際会議」が2月から7月にかけて開催され、7月の時点で、米国の要求を拒んだタリバン政権に対して、米国が「オサマ・ビン・ラディンを引き渡さなければ10月には爆撃する」と通告していたとパキスタンのナイク元外相がBBCに語っていること、しかし不思議なことにそのオサマ・ビン・ラディンの捜査責任者であったFBI副長官ジョン・オニール氏が「ブッシュ大統領及びサウジアラビア政府によるオサマ・ビン・ラディンの捜査妨害」に抗議して8月辞任、世界貿易センタービルの管理責任者に就任、ブッシュ大統領が「オサマ・ビン・ラディンによる犯行」と断定した9月11日、ビル崩壊で死亡していること、CIAはオサマ・ビン・ラディンと接触があっただけでなく、9月10日には「引き渡しの交渉」が行

われる予定であったが CIA が約束の地に姿を見せず11日の事件がおきたこと、予定通り空爆は行われ、新しい暫定政権の責任者には米国石油企業のコンサルタントだったカルザイ氏が就任したこと、等々。おぞましくも奇奇怪怪な情報が現にある。「空爆」の件によって「テロ」が引き起こされたとすれば、9月11日の理解は世情の理解とまったく異なったものとなる。「テロリストの仲間」ということで多くの

<フォーラムを終えて②>アフガンにも春は来るのだろうか？

当クラブの「ユーラシア紛争地特別フォーラム」が行われた3月9日(土)は、曇一つない快晴であった。風もなく穏やかな太陽がさんさんとふり注ぎ、最高気温は平年より3.7度も高い15.3度まで上がった。会場となった小野講堂のある早稲田大学キャンパスには、上着を脱いでベンチでのんびりとくつろぐ人たちの姿が多く見られた。

そして、小野講堂のすぐ近くの、キャンパス内で例外的にしゃれた建物である演劇博物館の前では、何本かの満開の紅梅が濃郁たる香りを放っていた。文字通り、春到来の1日であった。会場は我々の心配をよそに、百数十人の方たちで溢れたが、この賑わいは素晴らしい天気に誘われたせいであったのかもしれない。

このように、日本の「四季の恵み」を実感した1日であったが、フォーラムでは、その対極の悲惨な環境で苦しんでいるアフガンなどの難民とならざるを得なかった人たちの、とても語り尽くせないようなおぞましい実態が、多くのパネラーの方たちから報告された。何年にもわたってアフガンやパキスタンの難民キャンプの実態を取材しているフォトグラファー、川崎けい子さんは、戦火を逃れて難民キャンプにやってくる人たちが、食料がないため石を食べて空腹をまぎらわしていること。また、去年は元気に飛び回って遊んでいた幼児が、今年会ってみたら、不衛生で劣悪な環境のキャンプ内で重い病気にかかり、去年よりも身体が小さくなってしまっていたことなどが、報告された。

<フォーラムを終えて③>ジョンを忘れるな！(リメンバー・ジョン)と見えない戦争

若林一平(文教大学教授)

今回の第1回紛争地フォーラムは、早稲田大学小野講堂という地の利と知名度とも、いわば最高の舞台を与えられての開催であった。大野さんがいったんは諦めていた新宿の事務所の物件が見つかって以来の快挙といっていよう。しかも、今後継続しての利用が可能という。この幸運を生かさず手はないだろう。それもこれも早稲田の伊東一郎先生のおかげなのである。しかもその伊藤先生の父上はカープルの日本大使館に外交官として勤務していた。そのときの美しい時代のアフガンのスライドがフォーラムで披露されたのだ。

このように、今回のフォーラムほどさまざまなつながりが凝縮した集まりをこれまで経験したことがない。そのつながりがユーラシアンクラブといういわばブラックホールに吸い込まれ、見えない戦争と言われるアフガンとチェチェンの紛争をときほぐしていくエネルギーに転化しつつあると言っても言い過ぎではないであろう。

今回のフォーラムは、第1部から第5部まで物理的にだけでなく、第5部では、実行委員会を継続して紛争地に代表を派遣して報告会を開くこと、また紛争地に生きる人々への支援を継続することが福井

アフガン人の命が奪われたが、世界貿易センタービルで無くなった米国民やアフガン人に対する、挑発したブッシュ政権の責任は度し難いものとなる。無関心が覆う世界で「悪の劇場」のシナリオが書かれ、チョムスキーが言う“ならず者”が正義を演じている可能性があるのだ。情報の通りだとすると正義の国は一転してならず者国家になる。情報の正確な把握のため努力が必要だ。

福井伸彦(出版社経営)

“這えば立て、立てば歩め”のことわざのように、子どもはどんどん成長し、身長は大きく、体重は重くなっていくのが当たり前なのに、私たちの常識とは反対に、時間が経つと却って小さく、軽く、そして重い病気で身動きもできなくなってしまふ難民キャンプの子どもたち。これ以上の不幸を私たちは想像することができるだろうか。

また、パキスタン人のイスラム教徒の団体で、日本で集めた衣料品や薬品を援助物資としてアフガンに送っている「マシド大塚」のスタッフから、アメリカの有力なNGOが医療支援と称して、アフガンの子どもたちに認可前の薬品を注射して、人体実験まがいの行為を行っていること。また、一切マスメディアでは報じられていないが、アフガンではサリンや劣化ウラン弾が使用されているとしか考えられない症例が、誤爆などを受けた現地の人たちの間に広がっていることなどが報告された。

これは、米大統領のブッシュが、戦術核兵器の使用の可能性を含めて世界中に拡大しようとしている「対テロ戦争」の脈絡の中の、「予行演習」的行動表出の一例であるとしたら、いったいどういうことになるのだろうか。私たちはのどかな春の日差しの中で、フォーラムを成功させることができたけれど、アフガンやチェチェンなど、不条理な紛争の犠牲となっている人たちに、果たして春が来るのであろうか。

私たちが享受しているこの麗らかな春を、少しだけでも彼らに分けてあげられたらと思う。

内容的にもスーパーヘビー級に値するものであった。そして、第1部の重みが全体を象徴している。アフガンの子どもを探し求めるフォトグラファーの川崎さん、そしてNGOの真実に迫るマシド大塚のホールンさん、いずれも「見えない戦争」に風穴をあける人たちであることは間違いない。ベトナム戦争のときとの違いは、まさに超大国がひとつということだろう。どこまで見せるかも戦争遂行者側が自由自在に制御しているのである。

最後に、最も肝心なことを素通りしてしまう今の時代の流れが問題にされた。9月11日に、一体誰が誰を殺したのか？これが事件の出発点であるはずだ。この核心がいつにも明らかになっていない。フォーラムでの大野さんの叫びを聞いてみよう。世界貿易センターの瓦礫の中で無念の思いで亡くなっていった、FBI副長官のジョン・オニールの話である。やはり、テロにも報復にも反対することが最も真つ当な選択だったのである。

さんから提案された。僕も実行委員会に参加して、いくらかでも役に立てたらとおもう。

ブリヤート・モンゴルをたずねて

2月にブリヤートとモンゴルに行ってきました。2月8日、ブリヤート共和国の首都ウランウデで開催されたサンジェーエフという言語学者の生誕100周年で行われた学会に参加するためでした。

ブリヤートは二年ぶりでした。ブリヤートといってもピンと来ない人もいると思いますが、ロシア連邦内の民族共和国でバイカル湖の西岸、モンゴルの北にあり、モンゴル系の人々が住んでいます。

一週間という短い間ながら、ウランウデでは、以前見たような、投げやりなデザインの商品が減り、これはいいなと言うように購買意欲をそそるような商品が増えました。もちろん並べ方やショウケースなどもよくなっていました。新しい建物が続々と建てられています。それと、以前と比べると生活が落ち着いたからか、随分本屋が増えています。

モンゴルの首都ウランバートルは6年ぶり。やはり首都、かなりいろいろなところに投資が行き届いているからか、はたまた援助によってなのか、街が随分きれいになり、建物の外見も打っているものも6年前と比べるとレベルアップしていました。街頭ではロシア語が消え、モンゴル語、あるいは韓国語や中国語、それに英語が随分見えるようになりました。特に街で見る商品や、車、それに料理屋さんなどでかなりハングルが目につきました。韓国から人も結構来ているようですし、韓国へも人がいっているようです。一説によると韓国に住むモンゴル人は2万人、人口が210万程と言われているので約100分の1が韓国に住んでいる計算になります。人的交流、経済的な交流が進んでいるからか、韓国語学習者の数が日本語学習者の数を抜いたと聞きました。モンゴルで日本のテレビドラマが放映されているとは聞いていたのですが、今回、帰りの飛行機を待つ間に待合室でモンゴルの人々が眺めていたのは韓国のドラマでした。田中克彦先生は自著『草原の革命家たち』(中公新書)のあとがきで、朝鮮がモンゴルを救うかもしれないと30年近く前に述べていましたが、他の誰もその当時予想できていなかったことが、驚くべきことに現実になったようです。

ブリヤートでの発表のテーマは、ブリヤートの近代化を夢見た知識人による言語改革でした。ブリヤート語、モンゴル語を復興させようとした試みから70年たった今、この二つの言語は対照的な運命を辿ったようです。

今回、大阪からウランバートルに向かった飛行機で聞こえたのは、

荒井幸康 (一橋大学大学院博士課程)

モンゴル語のアナウンスメント。昔、いろいろなところで感じた社会主義的なレトリックが消え、このようなところからも以前の体制が払拭され、モンゴル人の思考が以前とは変わり始めたのではないかと感じました。一方ブリヤートでは若者がブリヤート語を話せなくなっている、とか、もう一、二世代後には消えてしまうのではないかとという声がよく聞こえます。

つい最近のことではありますが、3月9日、10日大阪の国立民族学博物館で「ブリヤート・モンゴルにおけるアイデンティティの重層性」という題で研究会が行われました。ロシア、モンゴル、そして中国と日本在住のブリヤート人も参加し、作業言語をモンゴル語にした珍しい研究会でした。私はここで20世紀初めのブリヤート知識人の民族復興の試みやソヴィエトが行った言語政策などを中心に発表したのですが、それをフォローした田中克彦先生のコメントの後、ブリヤートの人々からの参加者から質問の手がたくさん上がりました。中でもロシアのブリヤートから来た学者が「ブリヤート語はどうやったら教えるだろうか？」と非常に深刻な質問が出ましたが、答えることができませんでした。国境を超えてモンゴル国、ロシア(ブリヤート共和国)、中国(内蒙古自治区)三つの地域に分断されたブリヤートはこの後どうなるだろうかということが話し合われました。非常に危機的であるという認識はロシアのブリヤートだけではないようです。様々な人が参加したこの会議、中国、モンゴル、ロシアいずれでも分離主義、民族主義的傾向を警戒する動きから不可能であること分かりました。とくにモンゴルから参加したゲストには1990年代初めにモンゴル国首相であったビャンバスレン氏がおり、彼が見、聞いた様々な情報が適所で挟まれ、非常に深く面白い会議になりました。

ダニエル・ネットル、スザン・ロメインの『消えゆく言語たち』(新曜社)という本を最近読みました。田中先生もこの本でもいっていることですが、今世紀中に6000以上ある言語の半分が消えてゆくことになるだろうと述べています。また、『消えゆく言語たち』の中では、それらの言語が話されている地域は環境問題で保護されなければいけない地域と重なり合う部分が多いそうです。

今回紛争地域フォーラムで焦点を当てた地域にも小さい言語が生き残っている地域が多くあります。今世紀をこれらの言語、そしてそれを話す民族は生き残れるのでしょうか？

◎ ユーラシアンクラブのサポーター会員を募集しています

ユーラシアンクラブは、3月のユーラシア紛争地フォーラム、プハラ・民族アンサンブル特別公演の開催等理解促進のための事業や留学生などとの親睦、少数民族村の支援などをボランティアスタッフの無償の活動を支えに進めています。毎週のスタッフ定例ミーティング、ニュースレターの発送など、日常活動にも経費がかかります。財政的に支えていただけるサポート会員を募集しています。

年会費は1万2千円。振込み先は、「東京三菱銀行虎ノ門支店 口座1053500 ユーラシアンクラブ オオノ リョウ」もしくは同封の郵便振替用紙をご利用ください。

(発行) NPO 法人ユーラシアンクラブ (発行人) 大野遼 (編集人) 井出晃憲
住所: 〒151-0053 東京都渋谷区代々木2-13-2 第一広田ビル
電話/ファックス 03-5371-5548 E-mail: PAF02266@nifty.ne.jp
homepage: <http://homepage1.nifty.com/EURASIANCLUB/>